

第一章

「お疲れ様でした」

長丁場の撮影を終え、出演者の方々が現場を出て行く。

少し予定が押してしまったせいで、もう少しで日付が変わってしまう。

機材を片付けていると、その中でもひときわ目立つ主演俳優の彼とすれ違う。

彼はニツコリと微笑むと――

「……いつものとこで、待ってるから」

私だけに聞こえるよう、ぼそつとつぶやいた。

★★★

（うう……エレベーター来るの遅い……）

仕事を終えて、『いつものところ』――ホテルに到着したのは、彼が上がってから一時間後。

テレビ局からタクシーに飛び乗り二十分。もう一時間半近く遅刻だ。

撮影後に彼がいつも泊まっているホテルは高層階に芸能人御用達のシークレットルームがあるのだが、そこへ行くまでに様々な手続きを踏まなくてはならず、なかなかの時間がかかってしまう。

ようやく来たエレベーターに飛び乗り、彼の待つ部屋へと向かう。

ドアをノックすると、僅かに開いた隙間から、

彼の顔が覗いた。

「遅かったね」

「ごめんなさい。別件の伝票精算とか頼まれちゃって……」

「いいって。君が忙しいのは分かってるから。ほら、早くおいで」

手招きされ部屋の中に入る。

おずおずと近付くと澄遥さんがくつと私の顎をつかんだ。

「……んっ」

素早く舌を差し入れられて、ぢゅう♡と唇に吸い付かれる。

「……ずっと、待ってたんだよ？ 俺、君とセックスするの楽しみにしてたんだから……」

今日はたっぷりお仕置きだからね？」

「ふぁ……ふぁい……♡♡」

柔らかく低い声が耳朶を打つ。

鼻腔をかすめるスパイシーな香水の香りは、まるで媚薬のように思考を霞ませて。すっかり骨抜きになった私は、ふやけた顔でへらつと笑つてうなずいた。

私が彼——雨水澄遙（うすいすばる）とセフレ関係になつて、一年くらいが経つ。

いや、セフレなんておがましい。「性処理係」とでも言つた方がしつくりくる。

実際、澄遙さんにもそう言われたし。

朝のドラマに出演したことがきっかけで大ブレイクし、今や彼の顔をテレビやネットで見ない日はないくらいの人気絶頂のイケメン俳優だ。

日本人離れしたすらりとした体型に、色素薄目の甘い顔立ち。

そしてラブコメディから重厚な歴史物までどんなジャンルの役柄でもこなしてしまう彼は、ドラマや映画にひっぱりだこ。

加えてバラエティや舞台挨拶で場を盛り上げるトーク力に、現場でも腰が低く気遣いが出来ると評判の人柄の良さ。どこを取っても完璧で隙がない。

「抱かれない男」ランキング数年連続ナンバーワンの名を欲しいままにし、日本中の女性が憧れてやまない存在。

そんな彼が、どうして私のような地味な女を抱いているのか未だに理解出来ない。

……いや、地味だからか。

芸能人と違って、冴えないテレビ局ADの私なら、やり捨てても支障はないだろうから。ある番組のオールアップ後の打ち上げで一緒になって、酔った彼に口説かれ誘われるままにホテルへ。

てつきりそれつきりだと思っていたのに、連絡先を交換させられ、収録の後気まぐれに呼び出されてはセックスして別れる。

それだけの関係だ。

でも、それでもいい。

私はずっと、澄遥さんのことが大好きだったんだから。

「ちゅ……ちゅふ……ちゅ……んう……♡」

澄遥さんから貪るように口内をねぶりまわされ、首に手を回す。

「舌、もつと出して」

命じられるままに舌を目一杯突き出すと、ぢゅううううう♡と千切られそうな位に根元から吸い上げられた。

（はぁぁ……♡このキス好きっ……♡）

澄遥さんは物腰柔らかいけれど、セックスの時はどちらかというとSっぽい気がする。そのギャップも、たまらないんだけど。

「今日もこの服なんだね」

唇を離した後、澄遙さんが私の着ているベージュのブラウスをちらりと見て微笑む。

「あ……っ。し、仕事だとい、動きやすい服装になっちゃって……」

ADはオフィスワークが多いとはいえ、現場にで動き回ることも多いので、単色のブラウスと黒いパンツというシンプルな格好になってしまう。

「い、いつも似たような格好で……つまらない、ですよね」

「そんなことないよ。似合ってる」

ブラウスをたくし上げ、ブラをずり下げて剥き出しになった乳房を乱暴に揉み潰す。

ぎゅ、と痛いくらいに指が乳肉に食い込み、「んっ♡」と声をあげてしまった。

「はは、痛くされて感じてる。君ってホントMだね」

「そっ……♡そんなこと言われてもお……♡」

ぎゅうう♡と真っ赤になるくらい乳房を握りしめながら、乳首を指でくりくり♡と撫でる。

触れるか触れないかのじれったい愛撫と、乳肉に爪をたてて握り潰す痛みのバランスが

絶妙で、つい甘い吐息が漏れてしまう。

「はあ……♡んう……♡いった……♡」

「牛みたいに大きなおっぱい、搾ってあげるね」

人の好きそうな笑みを浮かべながら、ぎゅうう♡と根元から乳房を搾りあげる。

「やあああ……♡痛いよ♡やめてえ♡」

強く乳腺が扱かれて本当に母乳が出てしまいそうだ。

「痛いんだ？ でも痛いの好きだよね？ もっとしてあげる」

今度は乳首をぎゅうううう♡♡♡と目一杯引つ張られる。

「やあああ♡乳首伸びちゃう♡♡」

「フフ、びろびろに伸ばすのも面白いかもね」

乳首から手を離し、たぶん♡と下乳を手の平で持ち上げてぶるぶる揺らす。

「なーんてね。ホントにかわいいね、君は」

澄遥さんに囁かれキュンとしてしまう。どうせ口だけのまやかしだつて分かつてるのに。

「痛くしちゃつてごめんね？ 君つてつい虐めたくなくなっちゃうんだよね」

「い、いえっ……わ、私、虐められるの、好き、ですし……♡」

「ホントに？ じゃあ、もつとイジめちゃうよ？」

今度はズボンをズリ下げられ、ショーツの上から秘裂をぐにと押し込まれる。

澄遥さんの指は的確に私のクリトリスの位置を捉え、つんつん♡と先端を突いてくる。

「もう勃つてるし。君のクリ、また大きくなつてない？」

「え……♡そんなの、分かんない……ですう……♡」

「こんなデカクリ、そうそう見ないって。これ、家でもイジってるよね？」

クリの形を確かめるように、きゆう♡と指で淫核の根元をなぞる。くつきり♡とショーツの上からでも分かるくらいにぷっくり♡肉豆が浮き上がってしまう。

「うわーデカすぎ。これ、もはやちゃんぽじゃん？」

「そんな……こと……言わないで……♡」

「俺に弄られるだけでこんなになんないでしょ。どんだけオナってるの。ほら、言ってみて？」

低音ボイスで囁かれてぞくぞく♡してしまう。

「や……だあ……」

ささやかな抵抗を示してみるが、かぶっ♡と耳たぶに噛みつかれあっけなく崩れ去る。

「ほーら。言いなよ」

「ん……はあ……♡毎日……指で……クリオナ……してますう……♡」

「どんな風にしてるの？」

「澄遥さんに……♡されてる時……♡思い出してえ……♡指で……♡くりくりって……♡♡♡」

♡

「ふーん。こんな感じ？」

ぷっくり♡ショーツから浮き上がった肉芽の根元をほじくるように強く指で押す。

きゆうん♡とクリトリスに悦痺が走り、ますますビンビン♡になってしまった。

「ひゃあん♡」

「うわ、またデカくなった。どんだけ成長するの、このエロクリ」

指先でぴんつとはじかれ「おうん♡」と下品な声が漏れる。

もうショーツは愛蜜でびしょびしょ♡で、直に触ってほしくて仕方ない。

もじもじと内股を擦り合わせていると、澄遙さんが意地悪い笑みを浮かべた。

「なに、やけにもじもじしてるけど、おしっこ漏れそうなの？」

「ち、違いますう……♡その……」

つうう♡と焦らすようにクリトリスの輪郭をなぞり、ぐちょぐちょ♡に濡れた割れ目を軽く撫でる。

あと少しで届きそうな高みに登り詰められなくて、もどかしげに腰をよじつてしまう。

「はつきり言ってくれないと、分かんないな」 「んっ……♡そんな……っ♡」

柔らかいタッチでとんっ♡とんっ♡と何度も肉芽を叩かれ、たまりかねて震える声を絞り出す。

「オッ……オナニーしすぎたエロデカクリを……っ♡澄遙さんの指でえ……♡直接シコシコしてくださいっ……♡」

「はは、よく出来ました」

「あっ♡」

シヨーツを引きずり下ろされ、剥き出しになった恥丘をぐつと掴む。

「もうずるむけじゃない。じつくり剥いてやろうと思ってたのになあ」

ピンピン♡にそそり勃ったクリトリスを指で摘まみ、ぎゅうつと引つ張り上げる。

「ひゃあああん♡いきなりっ引つ張るなんてええ♡♡♡」

「ホントに、ちんぽみたいだね。射精出来るんじゃない？」

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

根元から強く指で腫れ上がった淫芽を擦り上げられ、腰がカクカク震えてしまう。

お尻にぎゅつと力を入れると、ぎゅぎゅつ♡とおまんこの奥が縮み上がった。

「こんなデカクリ、恥ずかしくて他の男には見せられないね。みんなドン引きしちゃうよ」

「はああ……♡ほっ、他の男なんて、いませんからあ……♡♡」

「ふうん。どうかなあ？」

ぞりりりっ♡

勃ち上がった肉豆の裏筋を指腹で強く擦り上げる。

「ひんっ♡」と裏返った声が出て、膝がかくと崩れそうになった。

「もうイっちゃうの？ 俺の許可無くイっちゃダメだよ？」

「ひゃい♡」

くちい……♡

右手の人差し指がどろどろにぬかるんだおまんこに入ってくる。

本当はそれだけでイッてしまいたいそうになるけれど、歯を食いしばって何とか耐え抜いた。

「ねえ、なんでまんこ弄ってないのにこんなぐちゃどろに濡れてんの？」

「ごめんなさい♡だってえ……♡クリあんなにいじられたらっ……♡」

「じゃあ、もつと弄ってあげる」

くちゅ♡くちゅ♡

入り口付近を浅く抜き差ししながら、親指で肥大クリを軽くぴんっ♡ぴんっ♡と弾く。

「あっ♡同時になんて♡卑怯……ですう♡♡」

「へーオナホのくせに俺に口答えるんだ？」

口に左手の人差し指を突っ込まれ、ぐちゅぐちゅ♡と抜き差しされる。

「おぶ……ちゅ♡ぶちゅ……♡」

淫らかな音を立てて吸い付くと、澄遥さんが嘲るような笑い声を立てた。

「エッロいしゃぶり方するね。どこで覚えたの？」

「ん……ちゅ……♡ちゅ……♡」

ほっそりとしてしなやかな澄遥さんの指が、私の口腔内をぐちゃぐちゃ♡と蹂躪する。

私の唾液まみれの指すらも美しい。

どこもかしこも完璧な澄遥さん。きれいな澄遥さん。

すつと伸びた背筋も、何か考えている時は子供みたいに唇を尖らせるクセも、笑うと目尻に溜まるシワも。

全部全部大好き。

本当は彼に見つめられるだけで達してしまいそうなくらい、愛しくてたまらない。そんなことはとても、本人には言えないけど。

くち♡くち♡くち♡くち♡

蜜口を浅くかき回していた指先が、クリトリスの裏のざらついた部分に触れる。

と同時に淫核をぎゅう♡と押し込まれ、全身に電流を流されたみたいにビリビリ♡と快感が駆け巡った。

「ん、おおお、お♡やつ♡クリとおまんこ一緒になんて♡んお、お♡」

「ハハ、鼻水出てる、スゲー顔。やらしく。もつとアへ顔見せてよ」

ぐつち♡ぐつち♡ぐつち♡ぐつち♡ぐつち♡

ぐりゅ♡ぐりゅ♡ぐりゅ♡ぐりゅ♡ぐりゅ♡

パンパン♡に膨れあがった肉芽と、ぷっくり♡充血した肉天井を同時に責め立てられ、びくんびくん♡と痙攣が止まらない。

かりっ♡と膣粘膜を引っかかれると、カラダが大きく跳ね上がって、更にびくんびくん♡してしまう。

「。おっ、。おっ、ん。おっ♡あっ♡っほお♡」

「自分から腰振ってヨガって、発情期のメス犬みたいだね。ほら、鏡観てみな？ 鼻水とヨダレ垂らしてだらしなすぎ」

「ああああ……♡やらああ……♡」

鏡の前へ連れて行かれ、クリとおまんこをいじられて自分からがに股で腰をへこへこ振りたくる姿を目の当たりにさせられる。

なんてみつともない姿なんだろう。

でも――

（澄遥さんの指をおまんこに呑み込んでるのっ♡やばすぎ♡ああああ♡幸せっ♡）

一緒に映っている澄遥さんに、つい見とれる。

こんなのをファンの子たちや共演者の女優さんたちが見たら、なんて言うんだろう？
なんて優越感に浸ってしまう。

ぶちゅ♡ぶちゅ♡ぶちゅ♡ぶちゅ♡

折り曲げた澄遥さんの指がぐぐっ♡と淫褻を押し上げ、ぎゅうぎゅうと圧迫する。

粘膜を隔てて、クリトリスを押し潰す指とぶつかり、圧迫感と共に急速な快感感が駆け

ぬちゅ……♡つと秘唇を擦るペニスの感触に胸をときめかせていると、背後から澄遙さんの刺々しい声が飛んできた。

「物欲しそうな顔してるけど、なんか言うことあるんじゃない？」

私はすぐさま自分でお尻を割り開いて、くばあ♡と真っ赤に充血したおまんこをみせつける。

「はい♡澄遙さんのバキバキおちんぼ、私のぐちよぬれまんこにぶちこんでかき回してください♡」

頬を真っ赤に染め、期待を込めて澄遙さんを見上げる。

澄遙さんは呆れたようにくつ、と端正な顔を歪めて苦笑した。

「そこまで頼んでないのに……君ってホント変態だね」

「ご……ごめんなさい♡早くちんぽがほしくて……♡」

「フフ、素直な子は好きだよ。ご褒美に挿れてあげる」

ぐに、とヒクつく膣粘膜を肉傘が押し込む感覚と共に――

ずにゆにゆにゆにゆにゆううう♡♡♡♡♡

「あ~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡」

膣襞をかき分けて肉幹が体内を埋めてゆく。

ぞわぞわっ♡と腰を甘い痺れが取り巻き、お尻をゆさゆさといやらしく揺すってしまふ。

(入ってきたあああ♡澄遙さんの♡♡デカチン♡♡好きっ♡♡大好きっ♡♡♡♡)

ぶるるっ♡と全身をわななかせて、胎内に呑み込んだペニスを味わう。

潤みきった肉褌が、極太カリ高傘広ちんぽを悦んで抱きしめているのが分かる。

より深くちんぽを味わおうとびったりと足を閉じると、澄遙さんがゆっくとピストンを始める。

ずるる……っ♡と入り口付近まで引き抜かれ、ちゅっこ♡ちゅっこ♡と肉傘で浅く引つかれると、ぞわぞわっ♡と寒気に似た快感が背筋を這い上がってくる。

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

ベッドのシートにしがみつき、後ろからゆっさゆっさと揺さぶられる。

ぱちゅん♡ぱちゅん♡と私のお尻と澄遙さんの股間がぶつかる音が、耳に響く。

「あゝすごい、吸い付いてくる……っ。君のマンコ、沼みたい。今までで一番相性いいかも」

上ずった声で呟く澄遙さんの声からは本気で感じてくれているのが伝わって来て、嬉しくなる。

でも――

(一番……かあ)

少しだけ胸が疼く。順位をつけるのは、つまり比較対象がいるってことで。

私以外にもセフレが存在するのかも。

澄遥さんの口からはつきり聞いたわけじゃない。でも他のタレントさんは何人もセフレがいて、曜日を決めてローテーションで逢ってるって話も耳にしたことがあるし。

『国民的人気俳優』なんて肩書きがつくほど人気者の彼なら、いない方が不自然だろう。(当たり前だよ。私みたいな冴えない女は、きつとたまにつまみ食いする程度のポジシヨンだよ)

でも、それでもいい。

これが一時の夢でも構わない。

大好きな人に抱かれて、傍にいられるのなら。

「ほら、いつまで寝てるの。起きて」

「あ……っ♡」

ぐつと両手首を掴まれ、後ろから引き起こされる。

背中がしなり、ずぶりっ♡と肉杭が深く膣へ打ち込まれる。

「ひゃううううん♡♡」

さつき指で弄り倒されたクリトリスの裏をこすこす♡されて、びんびん♡と肉芽が勃起上がつてしまう。

「クリ勃たせて。君のクリチンポ敏感すぎるでしょ。はい立って」

「はう……♡」

のろのろと立ち上がり、ベッドサイドの壁に手をつく。

澄遥さんが私の顎をつかみ横を向かせると、全面鏡の壁にぐっぽり♡繋がった私と澄遥さんの姿が映し出されているのが目に入った。

「やああ♡丸見えになつてるよおお♡」

「アへ顔晒しながらまんこ丸見えでハメられてるとこ、よく見てみな？ みつともないね」

「やつ♡ああ♡恥ずかしいよおお♡♡」

片足を大きく持ち上げられ、ぐりぐり♡とカリ首で肉襷を抉られる。

膨らんだ膣天井をぐにっ♡ぐにっ♡と擦られると、お腹の裏が熱くてじゅわわっ♡と蕩けてしまいそう。

「あくもう、すっごいやらし……かわいいね。最高」

ちゅ、ちゅつと首筋にキスを落とし、澄遥さんが囁く。

カラダだけでもいい。澄遥さんに最高って言ってもらえるなら。

「っは……♡もつと……♡もつと奥まで来て……っ♡」

誘うように自分から腰を突き出すと、くぱくぱ♡と肉唇がペニスへ吸い付く。ヒダヒダをエラでごしごし♡擦られると、お腹の奥がカアツと熱くなる。

きゅつと窄まる膣奥に吸い込まれ、肉杭が膣襞を巻き込みながらぐぼん♡と行き止まりへと突き当たった。

「♡。おつ、おとおお。おん♡♡♡」

頭の裏が痺れて、目の前にチカチカと火花が飛び散る。

「ほらほら、子宮降りてきてるね。いっぱい突いてあげる」

とちゅ♡とちゅ♡とちゅ♡♡

澄遥さんが腰をグラインドさせ、角度を変えてとん♡とん♡と秘奥を叩く。

軽くノックされただけなのに、頭のとっぺんまで衝撃が突き抜けて雄叫びみたいな声が迸った。

「んひ、いいいい♡♡ポルチオフアックらめええ♡♡しゅきいい♡これしゅきしゅぎて♡おかひくなるからあ♡♡♡♡♡」

「こーら、締めすぎ。じっくり楽しみたいのに、これじゃすぐイっちゃうでしょ。緩くして？」

「ひょんなころ♡言われても♡。あ♡♡抜かにやいれえ♡♡」

ずろろ……♡ぐちゅ♡とちゅ♡ばちゅばちゅ♡

肉竿が絡みつく膣襞を引きずり、またとちゅん♡と蕩けた肉襞を押し込む。

ペニスが抜き差しされる度に、淫唇がめくれあがってタコの口みたいにむちゅう♡と

吸い付く。

ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡ぐちゃ♡ずぶっ♡どちゅどちゅっ♡

次第に抽送が速まり、秘奥を突き上げる一撃がどんどん重たく深くなってゆく。

「ひやううう♡あつひ♡子宮っ♡壊れちゃう♡おっ♡んお♡おおん♡」

「もう……締めるなって言ったのに……もしかしてイキそう？」

「いぎまずっ♡澄遥さんにポルチオファックされてっ♡みつともなくマン汁垂らしていぎまずっ♡」

「しょうがないなくじゃあ、イカせてあげる」

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

下からぐりぐりっ♡と肉幹で突き上げられ、腰がびくんびくん♡跳ねる。

肉襞の溝をこしこし♡と浮き立った血管が擦り、僅かに開いた子宮口をこちゅっ♡こちゅっ♡と肉棒が容赦なく抉る。

「はひいい♡もお無理いい♡イグっ♡イぎまずう♡澄遥ひゃんのデカチンに子宮犯されてアクメしましゅうう♡♡」

「ちゃんと言えていい子だね。ほら、イケ、イっちゃえ……！」

澄遥さんが私を抱きしめ、ぶるつと背中を波打たせる。

その瞬間――

どくん♡どびゅどびゅ♡

「んほおおお〜っ♡おっ♡。おおお♡♡♡」

薄い膜越しに、熱い进りが放たれる。

どくどくと胎内で脈打つ肉竿をぎゅぎゅう〜つと膣筒が食い締め、一滴残らず搾り取るうと蠕動しているのが分かる。

「はあ、はあ……ああ、もうイっちゃった。君のまんこ、気持ち良すぎ……」

「ふああ……今日もハメてくれて……ありがとうごじいましゅ……♡♡♡」

鏡の向こうの私は、どこもかしこも緩みきっただらしない顔をしていて。

とても、幸せそうだった。

「じゃあ、俺はもう帰るから。いつも通り朝までゆつくり休んで。ルームサービスも好きに取っちゃっていいから」

シャワーを浴びた後。

澄遥さんは帰り支度を調え、ベッドに腰掛けている私に笑顔で言う。

「は……はい……いつもありがとうごじいます」

「じゃ、おやすみ」

軽く手を上げ、澄遥さんは部屋を出て行った。

「……今日も、一緒にいてくれなかった」

ふかふかのベッドに寝転がり、枕に顔を埋める。

キングサイズのベッドは、ひとりで寝るには広すぎる。ほどよく保たれた空調。寝心地のよいベッド。ゆつたりとくつろげる広さのバスルーム。最高級のアメニティ。どれも私ひとりでは持てあましてしまう。

「……澄遥さんと一緒に、ここで朝を迎えられたら最高なのにな……」

澄遥さんが私と会う時はいつも、この最上階のスイートルームをキープしてくれている。そしてひとしきり行為が終わると、さっさと身支度を整えて帰ってしまうのだ。

これも、彼の優しさなんだと思う。

仕事で疲れ果てた私が一晩休んで出勤できるようにと、この部屋を取ってくれているんだろうし。

でも、セックスが終わって即シャワーを浴びて帰ってしまうのは、私に愛情がない証だろう。

ベッドで抱き合って愛を囁くような相手ではないのだと突きつけられているようで、虚しさで胸がいっぱいになる。

（寂しい……なんて言っちゃダメなんだよね）

クリイキもポルチオでイクのも卑猥なおねだりも全部、澄遥さんに教え込まれたこと。

澄遙さんが悦んでくれるなら、私はどんな惨めな姿でも晒してみせる。

私は、澄遙さんにとってセフレ以下。ただの暇つぶしで、性欲処理係。だからこれ以上望むのは贅沢だ。

ただ、彼の傍にいられたらいい。

欲望を吐き出すための穴でも構わない。

私はそれで、十分なんだから。

第二章

——それから、しばらくが経った。

「いやゝまさか澄遙さんとゆみかちゃんがねえ」

「澄遙さんって浮いた噂全然なかったけど、ゆみかさんと真剣交際してたってことなんですかねゝ」

「……」

昼休み。休憩室でスタッフたちが噂話をしているのを尻目に、ひたすらおにぎりをかじる。

澄遙さんと女優の有栖川ゆみかさんの熱愛報道が持ち上がったのが、つい数日前のこと。ふたりは今年の春のドラマで共演した時に親交を深め、交際に発展したらしい。

ゆみかさんのマンション近くで一緒に犬の散歩をしているところをパパラッチされたのだとか。

「一緒に犬の散歩なんて、もう同棲してるんですかね」

「結婚も視野に入れちゃってるのかな」

（……結婚、か）

ぴたっとおにぎりをかじる手が止まってしまった。

SNSでもふたりの交際は概ね好意的に受け入れられていた。

爽やかで人当たりのよい澄遥さんと、控えめで優しいゆみかさんのカップルは、好感度が高いらしい。

『美男美女カップルでお似合い！』

『ゆみかちゃんなら許す！』

『そのへんの一般女性とやらとお付き合いするより全然いい！』

と、澄遥さんのファンからも祝福されているようだった。

撮影時期から推測するに、ふたりの交際は私が澄遥さんと関係を持ったのと同時期だ。

という事は――

（やつぱり、ちゃんと使い分けてたんだな）

結婚を視野に入れた真剣なお付き合いは、ゆみかさんと。

そして性欲処理担当は私。

当然だろう。ゆみかさんとあんな獣みたいなセックスできるわけない。

使い捨てのオナホ代わりの私だから、好き勝手に性欲をぶつけられたんだ。

そんなのわかっていた。それでもいいと思っていた。でも、こうして事実として突きつけられると、やっぱり辛い。

(……潮時、なんだろうな)

もし今、澄遥さんが隠れて私と会っていることがわかったら、大変なことになってしまう。

マスコミのいい餌食だし、澄遥さんの築いたイメージが全て台無しになってしまう。

ゆみかさんとの関係も終わってしまうだろう。

だったら、私から身を引いた方がいい。

遅かれ早かれ、いつかはこんな日が来るんだろうと覚悟していた。ずっとこのままではいけない。

もう、夢は終わりにしないといけないんだ。

ぴろん♪

机に置いていたスマホがLINEのメッセージの着信を告げる。

『今日も、夜いつものところで』

澄遥さんからのメッセージだった。

「……」

スマホを握りしめたまま、画面をじつと見つめてしまう。

いつもなら即レスでOKするところだけれど、今日はそんな気になれない。

私は少し考えて、メッセージを打ち始めた。

『分かりました。夜話したいことがあるので、少しお時間ください』

★★★

（……もう、着いちゃった）

いつものホテルの従業員通用口の前に立つて、ぼんやりと眺める。

毎回なんだかんだと雑用をしているうちに一時間とか二時間位遅れるのはザラなのに、今日に限って、予定通りにタスクが終わって退社できてしまった。

私を送ったメッセージへの返信は『了解』と笑っている猫のスタンプ一つだけだった。

それがどういう意図なのか測りかねて気が重い。

初めて、行きたくないなんて思ってしまった。

というわけで、こんなところでうろうろしている。

自分から言い出したくせに、何やってんだか。

ぴろん♪

バッグの中のスマホが、メッセージの着信を告げる。

『今日も残業かな？ 着いたら連絡して。待つてるから』

澄遥さんからのメッセージはまるで私がここで立ち往生してるのを見透かしているようだった。

(……もしかしたら、上から見てるのかな？)

澄遥さんがいるであろう最上階を見上げてみるけれど、彼がこちらを見ているかどうかなんて当然わからない。

(……ここでぼんやりしても仕方ないか)

私はスマホをバッグにしまい、通口をくぐった。

「今日は早かったね」

部屋を訪れると、澄遥さんはいつものように穏やかに笑って出迎えてくれた。

「あ……は、はい。 珍しく仕事が早く片付いて」

「良いことだね。 それで話って何？」

ベッドへ腰掛けると、澄遥さんが備え付けのインスタントドリッブコーヒーの袋を開け

ながら尋ねる。

こんなすぐに聞かれると思っていなかったから、うろたえてしまう。

「あ……えつと……」

「俺に言いづらい話？」

澄遥さんがコーヒーカーップにドリップパックをセットして、ポットのお湯を注ぐ。

ほろ苦いコーヒーの良い香りが、部屋中に満ちた。

「その……澄遥さんって……有栖川ゆみかさんとお付き合ってるんですね？」

意を決して尋ねると、澄遥さんは「あゝ」と口の端をゆがめて苦笑する。

「もしかして、真に受けちゃってるの？」

「……違うんですか？」

「あれはただの話題作りだよ。来年俺とあの子が共演する映画が公開されるから、プロモーションの一環ってわけ」

「……プロモーション……」

「あんなの信じちゃったの？ 君も業界人なんだからそれくらい分かっていると思っただけだな」

ぼたりとドリップパックからコーヒーの雫が垂れ落ちる。

プロモーション。ただの話題作り。

その言葉に安堵したのは確かだ。

でも――

「……それでも、表向きはしばらく付き合つてることになるんですね」

「んーまあそうなるかな。どうせみんなすぐ忘れちゃうと思うけど」

「だったら……もう私とは逢わないほうがいいと思います」

「……なんで？」

澄遥さんが鋭い視線を私に向ける。こんな反応予想外だ。てっきり「あつそう」とあつさり了承してくれると思つていたのに。

「だ……だって、話題作りでも交際してることになってるんだったら、他に女がいるのは問題があると思いますし。もし、私たちが逢つてることがマスコミにバレたら、大変なことになるじゃないですか」

「君、そんなの気にしてたの？ どうでもいいじゃん。ゆみかちゃんだって男いるしさ。お互い仮面恋人なのは事務所含めて了承済みだよ」

澄遥さんが立ち上がり、私に背を向けてサイドボードに置いたコーヒークップからドリッパックを外してゴミ箱へ捨てる。

あんな風に、何の感慨もなくぽいつと捨てられるものだと思つていたのに。
どうしてこの人は、私を説得しようとしてるんだらう？

「どっ……どうでも良くないですよ。今回は仮面恋人でも、いつか澄遙さんにも本命が現れるかもしれないじゃないですか。その時私がいたら邪魔になっちゃうし。だから――」

「……は？」

澄遙さんがゆっくりと私を振り返った。

その瞳は怒りに満ちていて、ぞつとするくらい冷ややかで。

射抜かれたみたいに、動けない。

「君、自分が何言ってるかわかってる？」

「わ、分かってます、けど……」

「本命？ 君が邪魔？ いつ俺がそんなこと言った？」

ベッドに座っている私に詰め寄り、肩を掴む。

あまりの剣幕に体がすくんで、言葉が出てこない。こんな澄遙さんを初めて見た。

「い、言つてない、ですけど……普通はそうなるのかなって……」

「……君は、そう思っていたわけだ」

ははっ、と澄遙さんが嘲るような笑みを浮かべる。でも、それはいつもの余裕は欠片も無くて。

瞳には哀しみと混乱がいつぱいにたたえられていて、今にもあふれ出しそうだ。

（どうして、こんな目をするの？）

私なんて単なる暇つぶしで、飽きたら紙くずみたいに気軽に捨てられるような存在だとばかり思っていたのに。

目の前の澄遙さんは、まるで私を手放したくないように見える。

「へこむなあ。俺をそんないい加減な男だと思ってたの？」

「だ、だって……私は性処理係だつて」

「そうだよ。君みたいになんでも俺のいいなりになるド変態女、他を探してもどこにもいない。大事な大事な、俺だけの肉オナホだよ」

「……っ」

唇を押しつけられ、齒列を割って舌を差しこまれる。

口内粘膜を吸い出そうとするかのようにぢゅううううと深く舌を吸われて、息が出ない。

「んっ♡っふううううっ♡んっ♡んんんっ♡♡♡」

澄遙さんがちゅっ♡ちゅっ♡と下唇を食み、上唇の裏側を舌でめくるように舐め回す。

頬を舌先で蹂躪され、揉みくちやにされ、抗うことを許されない荒々しい口づけ。

（こんなキス……初めてっ……♡）

思うさま私の口内を颯り倒したあと、ようやく澄遙さんが唇を離す。

「はあ……あ……♡」

「そのまま、口開けといて」

顎を片手で掴まれ、舌に小さな錠剤をぽとと載せられた。

「何……を……？」

「うーん、気持ちよくなれるサプリ、かな？ 合法だから安心して」

澄遥さんが小首をかしげて、にっこりと笑う。

「なーんかメッセージの内容が怪しかったから、君が変なこと言い出す気はしてたけどね。こんなこともあるうかと準備しといてよかった」

「……っ、あ……っ……」

舌で溶けた錠剤から、熱が染み出すようにして口の中を灼く。

それは瞬く間に全身に広がり、頭の中まで侵入してきた。

かあつと顔に血が集まり、頬が林檎みたいに真っ赤になる。

「はあ……はあ……何、これ……身体、熱い……」

「もう効いて来たんだ。早いね」

澄遥さんが私の頬を優しく撫でさすった。

「君はこんなもの無くても感じまくっちゃってるけど。今日は手加減しないって決めたから」

「すばる……さん……？」

優しく撫でていた手が止まり、ガッ！ と両頬を強く押し上げられる。

澄遥さんはゾツとするような冷ややかな笑みを浮かべて、私へ囁いた。

「離れるなんて許さないよ。君が誰のものか、今日はきっちり分かせてあげるから」

澄遥さんが私のブラウスに手をかけ、ぷち、ぷち、とボタンを一つずつ丁寧に外してゆく。

いつもなら服を脱がすのもめんどくさいとばかりに手を突っ込んで、体をまさぐるのに。ただ服を脱がされてるだけなのに、はらり、とブラウスが肌を滑ってはだける感触だけでぞわぞわと快感が腰から這い上ってくる。

「……っ、あ……♡」

「ふふ、かなり敏感になってるでしょ？ 辛いよね。でもいっぱい焦らしてあげる」

ブラウスとズボンを脱がされると、ブラ越しにやわやわと乳房に触れられる。

いつも握りつぶさんばかりに力いっぱい掴むくせに、まるで羽のように優しくふんわりと撫でるばかりだ。

「う……ああ……♡いつもみたいに、痛くして、くれないんですか……っ♡」

「君の好きなようにしちゃお仕置きの意味ないでしょ？ 優しーくしてあげる」

「そ……そんなあ……♡」

くにつ♡と乳首をブラ越しに触れただけで、「あひっ♡」と裏返った喘ぎを漏らしてしまう。

既におまんこはびっしよりで、すぐにでもイキたいと媚肉が蜜を滴らせてきゅんきゅん♡疼いている。

「すっごい効いてるみたいだね。このサブリ、かなり感度アがるでしょ。いつもみたいにしちゃったら即イキだから、じっくり時間をかけて楽しませてもらうよ」

澄遥さんが意地の悪い笑みを浮かべる。

ああ、これは罰なんだ。

臆病で、傷つきたくない一心で彼から逃げようとした私への、戒めなのだ。

（だったら……受け入れるしか、ないのかも）

澄遥さんの指は、円を描くように乳房を撫で、下から持ち上げてたふたふ、と揺らす。

もうそれだけでジンジンおっぱいが痺れてびくびく♡震えてしまう。

普段だったら少しくすぐったい程度なのに。

「ずっとブラ越しじゃれたいでしょ？ 直に触ってあげるね」

澄遥さんの手が背中に伸び、ぷち、とホックが外される。

たっぷん♡とはちぎれそうな胸が、解放された悦びにぷるん♡と震えた。

「相変わらず牛みたいにデカくてエロいおっぱいだね」

そのまま指で愛撫されるのか。それとも唇で舐めてくれるのかとソワソワしていると、
「ちょっと待ってて」

澄遥さんが私から身を離し、ゴソゴソとクローゼットを漁り始めた。

「あつたあつた」

そのまま洗面所へ行き、何か洗い始める。

「お待たせ」

戻ってきた澄遥さんは、ローションと筆を持っていた。

「え……っ、何これ……？」

戸惑っていると、澄遥さんはローションの瓶のふたを開けて、筆の中に突っ込む。

筆を瓶から取り出すと、私の背後へ回りつつ♡と脇をなぞりはじめた。

「つめた……っ♡」

ひやりとした粘り気のある液体が、肌を滑る。

澄遥さんは何度も何度も、脇から乳房の中心を筆で撫で回す。

「ひやううう……♡♡♡」

その度にぞわぞわぞわっ♡と悪寒にも似た喜悦が、胸を這い回った。

「やあああ……♡♡♡こんなのっ、辛すぎるよお……♡♡早く、乳首触ってええ……♡♡」

「だーめ。君が乳首好きなの知ってるから、弄ってあげない」

乳輪近くまで這い回っては、また脇へ戻るの繰り返し。

じんわりと緩やかな快感は得られるものの、もつと強烈な刺激が欲しくてもどかしさに身体をくねらせてしまう。

普段乱暴に愛されているからこそ、この柔らかな愛撫がじれったくてたまらない。

「あつは♡お願い……します……♡乳首……撫でてえ……♡」

「堪え性が無いなあ。仕方ない。お願い聞いてあげる」

ちよん♡と穂先が乳首に触れ、くるくると円を描く。たつぷり♡とローションを含んで濡れそぼった筆がべったり♡張りついてくる。

「あゝ♡♡♡ちくび♡♡きもち♡♡ひゃん♡♡♡はあああん♡♡♡」

あつという間にびん♡と乳首が勃ちあがる。澄遥さんは更に責め立てるように、鋭敏になった乳首の先つぽをちよんちよん、と筆先で突く。

「んっひいん♡ちくびい♡しゅき♡♡いっぱいっん♡♡んしてええ♡♡」

「ハハ、乳首だけでそんな感じてどうすんの。まだ先は長いよ？」

澄遥さんが私の膝に手をかけ、ぱか♡とM字に開かせる。

ぺちゃ、と濡れた穂先が乳丘を這い、くびれをなぞって下腹部まで降りた。

焦らすように太ももの付け根を往復し、すでにぐっしり♡濡れたショーツ越しに筆先を押し当て、肉溝の周りをゆっくりとなぞる。

「はあああん……♡あつ♡あああん♡」

ショーツが透けるほどにぐしょぐしょ♡の股間の輪郭を、筆が描きだすようになぞっていく。

「すご、まんこの形が浮き上がってめっちゃエロっ」

澄遥さんは蟻の門渡り付近を何度も何度もなぞり上げる。

その度にぴく♡ぴく♡と微弱な悦痺に腰を震わせる。

でも、本当に欲しい快感に手が届かなくて、むずむずする。

サブリで感度が上がっているだけに、イキそうでイケないこの状態は頭がおかしくなりそうだ。

（早く、クリに触ってほしいよお……♡）

自分から見せつけるように腰を突き出すと、澄遥さんがくつと喉を鳴らして笑った。

「つたく、そんなにクリに触ってほしい？」

「ほしい……れすう♡いっぱいクリ弄って、クリちんぽしゅこしゅこしてほしいれすう

……♡」

「あーあ。蕩けた顔しちゃって。可愛いけど、だーめ」

ショーツ越しに、浮き上がった肉豆をこしょこしょ♡と撫でる。

ショーツ越しに触られているだけなのに、ちよつと突かれただけで飛び上がりそうなく

らしい感じてしまう。

「ひゃあっ♡クリいい♡撫でちゃダメええ♡♡」

ぬちよ♡ぬちよ♡ぞり♡ぞり♡

ショーツの上から執拗にクリトリスの根元をなぞり上げる。抜きあげるみたいにキワを丹念に撫でられると、むくむく♡と肉豆が盛り上がってショーツを持ち上げる。

「んお、おっ♡やらっ♡うそっ♡しゅごっ♡筆責めしゅごっ♡クリっ、ジンジン痺れりゅう♡♡♡」

「ハハ、これだけでクリちゃんぽフル勃起じゃん」

時折先端をちょん♡と突かれると、ビリビリ♡と電流を流されたみたいなの快感が身体のコを駆け抜ける。

「一緒に弄ったら、どうなるかな」

まだ快感の余韻が残っている乳首を指で挟んで軽くひっぱりながら、筆で淫豆をさわさわ♡する。

もうそれだけで、きゅうっ♡っとおまんこが縮み上がって、足の指がむずむず動いてしまう。

「んお、おん♡はっ♡あっ♡あ♡クリいい♡クリっ♡クリと乳首♡一緒にさわさわされると♡♡♡らめええ♡♡♡」

「まだイっちゃダメだよ？ 俺が許可するまで、耐えて？」

「んううう♡♡ふー♡♡ふー♡♡ふー♡♡♡♡」

唇を噛みしめ、必死に嬌声を押し殺す。

お尻に力を込めて、こみ上げる快感をやり過ごそうとするけれど、そんな私の必死の努力をあざ笑うかのように、澄遥さんは的確に性感帯を探り当てて筆を踊らせる。

くりゆくりゆ♡こりこりっ♡

乳首をきゆうっ♡と挟んで強く引っ張られ、ぐにぐに♡とショーツごと淫核をこしこし♡と筆で擦られる。

ぞわぞわぞわ♡と全身に喜悦が渦巻いて一気に快感の塊が身体の中を埋め尽くす。襲い来る絶頂の波に溺れそうで、つま先でせわしなくシートを引っ掻く。

「はふうううう♡♡ん♡♡ん♡♡ん♡♡ん♡♡ん♡♡ん♡♡ん♡♡」

食いしばる歯の隙間からヨダレを垂らしてせわしなく足をばたつかせる私を、澄遥さんが目を細めて見守る。

「耐えてる君って、すっごく可愛いな。新発見だったよ。もっと早く、やってみたら良かったな」

「。おおおん♡澄遥、しゃん…………♡もお…………ゆるひて…………あたま…………おかひくなりそ…………♡」

「じゃあ、イカせてあげる。で、イク時はどうするの？　ちゃんと教えたでしょ？」

しゅこ♡しゅこ♡

筆先がクリトリスの根元をほじくるようにキワを抉り、先っぽまでべったりと張りついて撫で上げる。

同時に乳首をぎゅううう♡と力いっぱい摘まれ、私は仰け反って何度もガクガクと身体を痙攣させた。

「うあ……っ♡いつぐ♡いぎまずう♡。おっ、。おおおおおっ♡♡♡♡」

ぶしゅうう♡♡

潮がじよわっ♡と漏れて、愛液まみれのショーツがおもらしたみたいにくっしより濡れた。

「あーあ。パンツびつちやびちや。ひっどいね」

「うあ……あ……♡ああああ♡♡♡」

だらしなくパカッ♡と開きつばなしの両もをびくびく♡と痙攣させ、空を仰いで呻き声を漏らす。

イキすぎるほどにイったはずなのに、まだ火照った身体は満たされない。

その証拠に、とろとろのおまんこ肉が物欲しげにヒクついて、早くちんぽを与えてくれと訴えているようだ。

そんな私の様子に気づいた澄遥さんが、愉快そうな笑みを浮かべて私の顔をのぞき込んだ。

「ちんぽ、欲しそうだね？」

「はひ……♡欲しい、れす……♡」

「そっかそっか。あんだけイっちゃったもんね。そりやちんぽハメてほしくなるよね」
ニコニコ笑って、澄遥さんが頷く。

次は遂にちんぽをハメてもらえるかも、と期待に胸を高鳴らせていると――

「でも、まだお預け。言ったよね？ 君が誰のものか分からせてやるって」

「……っ、そんな……っ」

「焦らして焦らして焦らして焦らして、俺のちんぽハメないと死ぬってくらいヨガらせてイキまくらせてあげる。それくらいしないと、君には分かってもらえないみたいだし」

今度は、サイドボードに置いてあるワイヤレスイヤホンの充電器に似たような器具を手取る。

「これ、なんだと思う？」

「……？ 充電器、ですか？」

「ブッブー。いわゆる吸引ローターだよ。使ったことない？」

「……いえ、ない、ですけど」

正直に答えると、澄遥さんが嬉しそうに笑った。

「良かった。経験者じゃ新鮮な反応得られなくてつまらないもんね。いつか君と楽しもう
と思って、色々用意していたんだけど、今日は全部使わせて貰うね」

【体験版はここまで。続きは製品版でお楽しみください！】